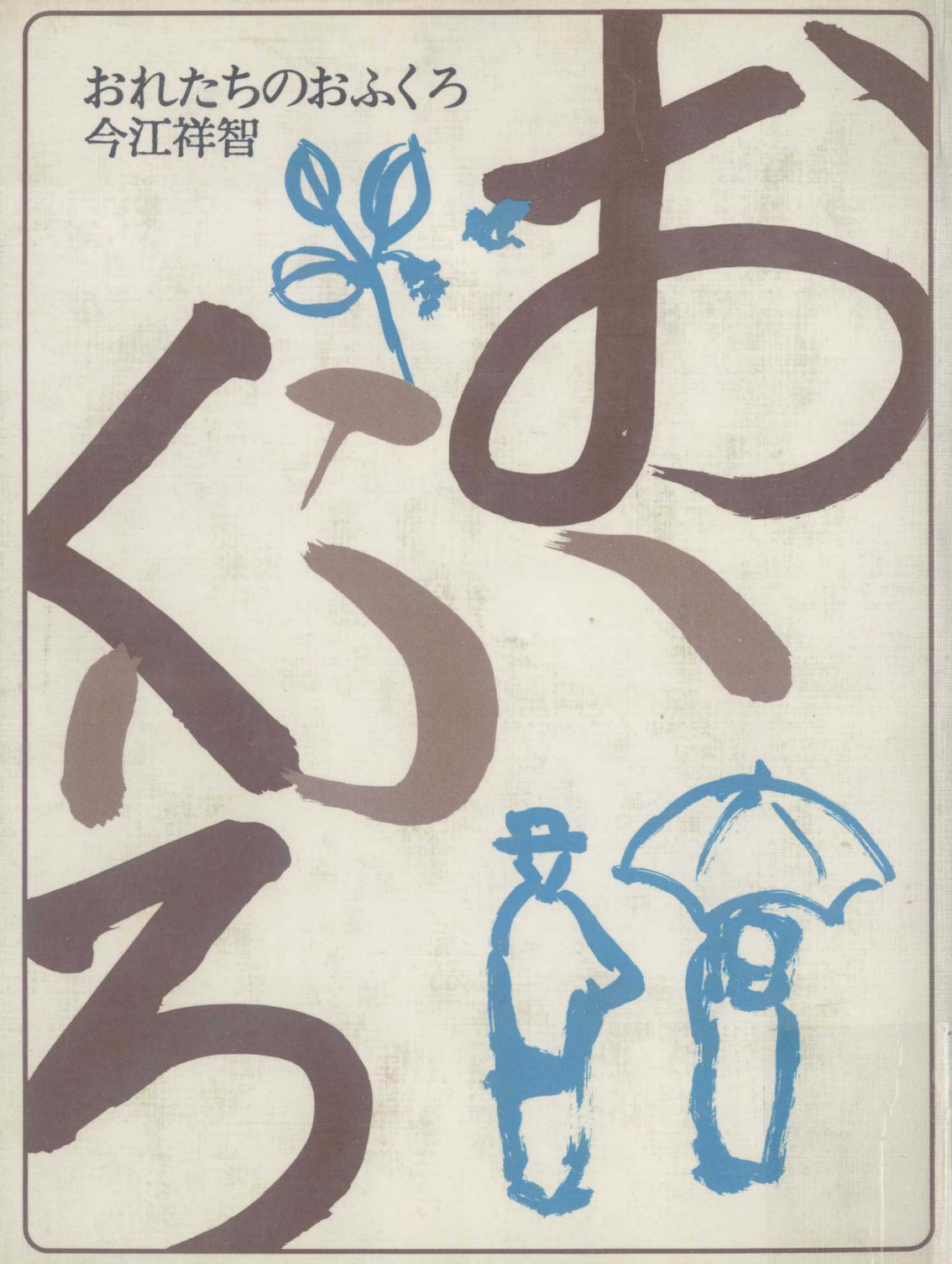
おれたちのおふくろ

今江祥智



おれたちのおふくろ

今江祥智＝作
長新太＝絵

本书是继《爸》《大哥》之后的完结篇《我们的母亲》，书中以母亲为主人公，记述她克己奉公、充满地为孩子们加油鼓劲，能一个人撑起孩子的事情。

今江祥智　京都市左京区北白川大堂町11の3

1932年大阪市に生まれる。同志社大学英文科卒業。名古屋で中学教員，東京で編集者暮しののち，京都に帰り，聖母女学院短大で児童文学を講ず。現在，著作に専念。『山のむこうは青い海だった』「ぼんぼん」「兄貴」「優しさごっこ」など多くの著書がある。
『今江祥智の本』全22巻（理論社）を刊行。

作者　今江祥智（いまえ・よしとも）　NDC 913　A5変型 20 cm 374P

画家　長　新太（ちょう・しんた）　1981年初版　8393—31523—8924

おれたちのおふくろ　1982年2月第三刷発行©

制作 小宮山量平　発行 山村光司　発行所　株式会社　理論社

住所　東京都新宿区若松町104番地　電話 03 (203) 5791　振替東京 9-95736

おれたちのおふくろ＝もくじ

第一章　と・き・よ・と・ま・れ……5
第二章　明治テニス小誌……20
第三章　何処へ……38
第四章　ああ、活動大写真……53
第五章　日傘とカンカン帽……69
第六章　コロッケの唄……69
第七章　ある日息子がやってきた……97
第八章　長男出生……112
第九章　赤い蛾の舞った日……124
第十章　世界は広し……138
第十一章　安定感について……151
第十二章　二つの人形……165
第十三章　蚕と帽子と天守閣……181

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第十四章　母さんの一番長い一日……196
第十五章　不思議な贈物……221
第十六章　二人の女……236
第十七章　正月の歌……251
第十八章　生霊死霊……266
第十九章　神隠しの日……279
第二十章　川を渡らなかった夜……292
第二十一章　やや抽象的に……316
第二十二章　孫とキョーサントー……327
第二十三章　東京のモンタン……342
第二十四章　死……359
あとがき　371

さしえ＝長　新太

表紙およびカバーの文字「おれたちのおふくろ」は
今江　冬子

第一章
と・き・よ・と・ま・れ

1

洋は、飛行機を見るのは好きだが、乗るのは好きではない。見るのなら、飛んでいる本物から紙飛行機まで、また、飾り窓に並べられた模型飛行機でも映画に出てくるのでも、美しいなと思う。けれど、自分が乗っかってあの高い空の上を飛ぶとなると話はちがってくる。

初めて乗ったときは、もの珍しさがいっぱいで、窓におでこをくっつけるようにして、地図とそっくりの「下界」を眺めおろしていてあきなかった。目的地の飛行場につくまでは、五分とはかからないように思えた。

ところが、二度目三度目に乗ったのが、ゆれにゆれた。エア・ポケットに落ちる。雷が落ちる。プロペラの調子が悪くて止り、片肺飛行になる。その度に、そのまま飛行機がおっこちてしまうのではないかと思われるくらい大ゆれした。

閉口して、以来できるだけ飛行機は使わないようにしてきた。

その洋が、飛行機――それもジェット旅客機に乗っている。羽田発―伊丹行の大型機で大阪にむかっていた。しかもそのあと、伊丹空港からすぐに高知へ飛ぶつもりでいた。そちらは洋が嫌っている〝よくゆれるプロペラ機〟――ＹＳ11型だったが、いまの洋には、それがゆれることよりも、その切符がまだとれずにいてキャンセル待ちということの方が心配だった。

*

一九六七年二月の第二日曜日の早朝、洋は電話のベルの音にたたき起された。しばらくぶりに聞く兄の洋次郎の声がうわずっていた。

―おふくろが急にあかんようになってしもた。危篤や。すぐきてんか。一番機に乗ってンか……。

せっかちな洋次郎はそれだけ言うと電話を切ってしまった。洋は受話器を見つめ、いま消えたばかりの兄の言葉を思いおこしていた。おふくろがキトク――やて……。そんなん嘘やろ。このあいだ病院から元気な字で葉書を書いてよこしてくれていた。春までには退院できますやろさかい、暖うなったら三人で高知へ遊びにきて、兄ちゃんにたかりなはれ……、と結んであった葉書の文字が、洋の目の前にあざやかにうかんで消えた。

ガラス戸越しの外は、しんと静かで、昨日ふりつもった雪が、まだとけずにうっすらと残っていた。朝日が真新しい雪の華の一つ一つをきらきら輝かせてのぼってきた。嘘やろ嘘やン……。洋は頭の中でも一度くり返し、こんどは口の中で、

―嘘や嘘や嘘や、おふくろが死ぬやなンて嘘や……。

と、お経でも唱えるようにつぶやいていた。

それから、急に子どもに返ったように、

—おかあちゃんが死ぬやなンて、嘘や。
もう半分涙声になっていた。

嘘ではなかった。しかし、それが嘘になるように祈りながら、洋は機上の人になっていた。日曜日のことだし、手もちの現金が少なかったこともあって、まず自分一人が、電話のあととびだして、とにかくジェット機に乗ることができたというわけだった。

上昇していた気配が消え、シートベルト着用のサインが消え、水平飛行に移ったのも気づかずに、洋は緊張した顔つきで、ま正面むいてしゃっちょこばって坐っていた。それを、飛行機恐怖症のお客と見まちがえたのか、スチュワーデスが、ほほえみながら近づいてきて、お客さま、もうベルトはお外しになってお楽になさって下さい……と声をかけてくれた。

—あ、そいつはどうも、失礼をいたしました。

洋は、なんだかとんちんかんな返答をしてしまい、スチュワーデスはこらえきれず、ふりむいて小さく吹き出した。洋はシートベルトを外そうとやってみて、反対に締めてしまった。スチュワーデスは、吹き出したおわびとでもいうように、親切にベルトを外してくれた。

—や、これはどうも、有難うございました。

洋は恐縮して、小学生みたいに坐ったまま気ヲツケの姿勢になった。それからやっとヤスメの姿勢にもどって、初めて水平飛行に移っていることに気がついた。窓の外には厚い雪雲をつききったはるか上の光り輝く青空があるばかり、ジェット・タービンの音もふいと静かになって、ゆれもほとんどなくて、洋はまるでどこかのビルのオフィスの椅子にでも腰をおろしているように思えた。

念のために、窓の外にもう一度目をやってみる。

青空ばかりで雲ひとつなく、これでは飛行機はほんとに飛んでいるのかどうかも分らないくらいだった。

旅なれたようにみえる外人客が一人、前部座席から立ってトイレへ歩いていった。高い靴音がひびいて、一歩ごとに、飛行機が小刻みに貧乏ゆすりでもしているように思えたが——それは洋の飛行機嫌いからくる恐怖心がつくりだした妄想だった。ジェット機は身ぶるいひとつせず、高度一万二千メートルの空にうかんでいた。そして新幹線の何倍もの速さで大阪にむかって飛んでいた。

スチュワーデスがジュースを配って歩いた。洋には人一倍親切に、お召上りになれば気分も落着かれます、おかわりもございますし……と声をかけてくれた。礼を言いながら、初めてその横顔に目をやった。誰かに似ていると思った。

(そうや、森さんや、森礼子さんや……)

小学校の二、三年生のとき同じクラスにいた女の子で、女の子たちのボスで、洋は森さんの肩くらいまでしか背丈がなかった。森さんは、そんな洋が、がき大将の東本くんらにとっては、いじめる格好の標的らしいとみてとるや、弟のように洋をかばい、

—この子に手ェだしたら、わたしが承知せえへンで。言うとくさかいな……。

と、保護宣言をだしてくれた。

そして言葉どおり、それでも洋にちょっかいをかけた東本くんをどやしてくれた。

(そうか、森さんがいっしょに乗ってくれてンのンか。ほならもう安心や……)

洋はあのころにかえった気もち、森さんの大きな体のうしろにかくれるような、ほっとした気もちに

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

なって、朝から胸にためていた苦い重いものを吐息にしてはきだしていた。やっと気もちが楽になり、そのまま座席にもたれると目を閉じた。閉じて、ほとんど数分もしないうちにまどろんでいた。夢はみなかった。洋は電話の前の眠りのつづきの中にいた。黒い、まっ黒いだけの、何もない「無」の世界に一人うかんでいた……。

体がふうわりともちあげられ、すぐにすとんと落とされて——洋は目をさました。一瞬、どこにいるか見当がつかなかった。短くても深い眠りの中にいたせいだった。どこかのデパートのエレベーターが屋上につき、その足でおり始めたのかな——と錯覚していた。けれど、エレベーターの外には、青空があった。その青さを見て、洋は自分がジェット旅客機の客として空にうかんでいることを思いおこした。

(それにしてもさっきとちょっともかわっとらへンな、あの空は……)

どこまでも光り輝く青空がひろがっているばかりだから、そう感じてしまうのも無理はなかった。

(時間がぜんぜんたっとらん感じや……)

洋が腕時計を見ようとしたとき、アナウンスがあった。まもなく着陸態勢に入るというのだ。

(ほんまにもうそんなに飛んでたンやろか、そやけど、時間が止ってたみたいに思えるンやけどなあ……)

それならばいっそ、ときよ、止れ……と思った。そしたら、おかあちゃんもずっと死なへンでもすむやないか。そうや、ときよ、止れや……。

洋は心の中で小さな男の子になって、右腕をたかだかとあげて叫んでいた。

—ときよ、と・ま・れ……。

すると、まわりのものすべてが静止した。

バラの蕾は開きかけのまま、蝶は薄い羽根を半開きにしたまま、風もそよいだまま、煙も風にたなびいたまま、ころびかけた女の子もそのままの姿勢で、牛はたべようとした草に短い首をのばしたまま、木こりも斧をふりあげたまま……。

（これはどこかで見たことある景色やないか……）

と、幼い洋は考えていた。

（そうや、『ねむりひめ』の話や。おかあちゃんがしてくれた、たった一つのちゃんとしたおはなしやった……）

かあさんは、自分は大だらいの前に坐り、幼い洋を横の木箱に坐らせて、ながながと洗濯していた。しながら話をしてくれていた。いつものでたらめな話ではなく、めずらしく、昔のフランスのお話やで——と前置きしてから……。もっとも、かあさんのは自分流に脚色してあったから「原話」とはだいぶちがってはいたが、それでも洋には新鮮だった。

—お姫さまが紡錘にさわらはったとたん、あーら、ふしぎ。なあもかも、ぴたっとうごかへンようになってしまいはりました。風も止って眠りはじめ、鳥も飛びながら眠りはじめ、お城の中の人もみんなぐっすり眠ってはりました——とォ……。

聞きほれながら、洋は心配になってきた。そんな、みんな眠りこんでしもたら、世の中、しーんとさびしゅうなってしまうがな。いったいどないしたら目ェさましてくれはンねンやろか。

かあさんはあわてずさわがず、洗濯物をこすりあわせるテンポにあわせて話をつづけていった。洗濯もののあるあいだじゅう、眠るものの名がつづけられ、もうそろそろ洗濯するものがなくなるとみるや、

王子さまを登場させた。やっぱり、と洋は胸をはずませ、いったいその王子さんがどないしてみんなを起さはンねンやろか——と、いぶかった。

かあさんはすべての洗濯物を洗い収め、しぼってしまうと、たらいの水を勢いよくあけながら、その水音のどさくさにまぎらせて早口で言った。

—そこで王子さまがねむり姫にくちづけをしはると——なにもかもが、いっぺんに目をさましはったとォ……おしまい。

洗濯の終りがおはなしの終りになった。しかし、かんじんのところが聞きとれなかった洋は不満だった。

—なんでや、なんでやのン、おかあちゃん……、どないしたら、みんなが目ェさましはったンやて？くいさがる洋に、も一度「くちづけ」という言葉を発音したくないかあさんがいいつけた。

—さ、お話したげたかわりに、ほすのン手伝うてや。

洋は仕方なしに立ちあがり、小さな方の洗い桶ごと洗濯物をかかえあげると、かあさんにつづいた。いまのいままで、かあさんの横に坐って、それこそ物語の中の人物と同じように、身じろぎもしないで聞いていた洋だったのが、いま、洗濯のおしまいと同時に、王子さまの「くちづけ」で眠りからさめ、動きだした連中同様、動きだしていた。地下の洗い場から玄関の三和土（たたき）へあがり、二階の物干し場まで、ついてあがった。

—ええお天気やさかい、じっきに乾きますやろ……。

うれしそうに言うかあさんに、洋はうなずきながら、まださっきの疑問にかあさんが答えてくれないのが不満だった。けれどこの秋晴れの空を流れる綿雲を見上げていると、もう二度とあのうす暗い眠れ

る森のお城へはかえれず、そのことにはふれられない気もちにされてしまうのだった……。

雲が走る。薄いきれいな巻雲が、つういつういと空を走る。雲は洋の眼下を走っていた。いつのまにあんな上のが目の下に——と首をかしげて、洋はわれに返っていた。

ジェット機の下を雲が走っていた。洋を乗せたジェット機はその雲のあいだをゆっくりと（ほんとはすばらしい速さで）通りぬけ——地上にむかって降下し始めていた。

2

案じていたとおり、キャンセル待ちになっていて、切符は一枚もないと言われた。洋は待合室で、いらいらしながら坐るしかなかった。そうしながら、洋は自分の気もちが細胞分裂のように、ぽっかり二つに分れるのが見えた。片方の細胞は、何とか切符を手に入れて乗りつぎ、おふくろさんの末期の水をとりたい、せめてものことにそれだけはしたい——と焦っていた。それなのにもう一つの細胞は、それとは逆に、自分が大好きだったおふくろさんの死の——断末魔の苦しみなんか見たくない——と逃げ腰でいるのだった。そんな、相反する二つの気もちを、洋は顕微鏡で眺めるように、思い描き、眺めていた。どちらも本心だった。細胞は二つに分裂したまま、ミジンコのように、洋の頭の奥で、ぴくぴくはねまわっていた。

——……号便の高知行きのキャンセルをお待ちの方、一番から三番様までおいで下さい。

突然のアナウンスが、洋の細胞の一つをはじきとばした。洋はひととびで窓口へかけつけていた。自分はたしかに二番のはずであった。

係員はいなかった。いそいでかけつけたあとの二人と、三人が顔を見合せた。黒ずくめの服装に、真冬だというのに濃いサン・グラスをかけたおあにいさんふうな三人目が、しびれをきらしてどなりつけた。

―誰かおらんかよ。ち、人をよびつけちょいてよ。

その声でやっと若い女性の係員が顔をだした。

―おんしゃ、三名様こいちゅうたやろが。

―それがそのう……キャンセルではなくなりまして……。

女性がしどろもどろに弁解した。

―ほたえな！

おあにいさんは、真剣怒っていた。

―そいじゃ、おまん、なんでアナウンスまでして人を呼びつきゆう……。

―それがそのう、大臣様御一行が急に乗られることになりまして……。

―おんしゃ、そりゃ、まっことか。

おあにいさんは、まだ迫った。

―はい。佐藤総理他二名様です。

―ん、総理やと。いかんちゃ……。

総理ときいておあにいさんは、あっさりひっこんだ。すると洋が一歩前へでた。

―総理やったら初めから特別機でも注文してはるのンとちゃうのン。

―ちゃいます。

女性もつられて大阪弁で答えてから、あわてて言い直した。
—ちがいました。まったくの急用だそうです。申訳ありません。
女性の最敬礼にうなずきながら、一番の老人がひき下り、内閣総理大臣様御一行では仕方なか……とつぶやいた。
そうなると、洋は一言文句を言いたくなった。
—こっちは、おふくろさんの危篤ですねン、一人くらい差しかえでけませんか。お伴の人やったら一人へってもよろしやろ。
するといままで低姿勢だった係員が、いままでの仇討ちみたいに、くってかかってきた。
—危篤と言われるお客様はよくおいでですが、何か証明になるもの、おもちでいらっしゃいますか。
—キトクのショーメイ?
洋は絶句した。兄貴め、せめて電報でもくれていたら、この小生意気な女の顔に叩きつけてやるのに……と歯がみしたが、電報をもっていない以上、できない相談だった。
—そんなもン、あるはずないやろが、ほんまにもう……。
ぼやきに近い口調で言うしかなかった。
—申訳ございません。
慇懃無礼に言って、ことさらしとやかにおじぎすると、係員はさっさと内へ入ってしまった。洋は唖然とし、憮然としてしまった。文句を言いつづける気もちも消えてしまった。三人はそれぞれに不機嫌な顔にもどり、待合室にもどっていった。
十五分後に、飛行機はあっさりと飛びたっていった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com